

世阿弥自筆能本からみたアクセント体系変化の時期について

坂 本 清 恵

一 はじめに

世阿弥自筆能本は声点と胡麻章とが施されており、室町時代の重要なアクセント史資料である。アクセント資料としての紹介と声点の反映するアクセントについては、坂本（一九九七）のとおりで、声点はいわゆる南北朝に起きたとされるアクセント体系変化を経たアクセントを反映する。⁽¹⁾しかし、声点は観世文庫所蔵本への差声がほとんどで、自筆能本全体からの言及には至らなかった。本稿では、観世文庫・生駒宝山寺所蔵の世阿弥自筆能本に施された胡麻章のうち、体系変化によつて式が変化する四拍までの名詞と第二類動詞に施されたものを中心に検討する。声点よりも世阿弥自身の施譜の可能性が高い胡麻章の反映するアクセントを明らかにすることにより、アクセント体系変化の時期との関わりをより明確にするとともに、世阿弥の節付けとアクセントに関する考えが作曲に実行されているのかも解明したい。

胡麻章は、「應永廿年閏七月」の奥書を持つ「難波梅[難]」にあ

るごくわずかな墨胡麻章が最も古く、他は應永三十一年から五年のあいだに成立とみられる。しかし、観世文庫所蔵の「松浦の能[松]」・「阿古屋の松[阿]」・「布留の能[布]」には、朱声点と朱胡麻章、「松[布]」には墨胡麻章もあるが、生駒宝山寺所蔵の「盛久[盛]」・「多々津[多]」・「江口[江]」・「雲林院[雲]」・「柏崎[柏]」は墨胡麻章のみである。胡麻章については所蔵ごとに検討する。

世阿弥自筆本の胡麻章は、謡本のように謡の部分すべてに施されてはいないうえ、胡麻章のある語のすべての拍に逐一施されてもいない。三宅晶子（一九九七）によると「先行の謡い物などをそっくり借用した場合には、ゴマ点も含め節付けはまったく付されていない。それに対しゴマ点が詳細に施されるのは自筆本執筆に際しての書き下ろし又は改訂部分に集中している可能性が高い。」⁽²⁾という。了解されている旋律に胡麻章を施さないのは、後の義太夫節の正本にも見られるところである。⁽³⁾胡麻章が世阿弥自身の作曲部分に施されたものであれば、その反映するアクセントも世阿弥自身の信頼の高いアクセント資料となる。施譜の用例と

抽出箇所は稿末にまとめた。アクセント参考文献は「日本語アクセント史総合資料 索引篇」(以下「索引篇」とその元になった資料)によった。

二 観世文庫所蔵本の胡麻章

「二一」[「難波梅」]の胡麻章

現存の世阿弥自筆能本中、最も早い時期に成立した「難」には「ニライモ」 $\langle UU \times \times \rangle$ 句「アリカタヤ」 $\langle UD \times \times \times \rangle$ 有難「ツクハ山ノ」 $\langle UU \times \times \rangle$ 筑波山」の例がある。墨で書かれたこの胡麻章は素朴な印象がある。「句」は、第二類動詞からの転成名詞であり、体系変化前「毘古」 \wedge 平平平 \vee 、変化後の「補忘」[「平節」]近松に●●○。「句」への施譜は、二つめの上げ胡麻が「イ」の上部であるが $\langle UU \times \rangle$ と認定した。これは体系変化後のアクセントを反映する。「ありがたし」に体系変化以前のアクセント史資料の確例をみないが、「平節」●●○○○とあり、古くは低起「あり」を前部にもつ形容詞第二類○○○●○で、語幹用法の「ありがたや」は体系変化後●○○○●○となったか。「筑波山」は「顕古・寂古」天観●●●●○で、体系変化前後でアクセントの式は変わらない。この例は助詞「の」下接例で漢字に胡麻はないが、高く平らに謡うことを示したものが。「松」[「阿」]「布」については、品詞ごとに検討する。なお、胡麻章と声点の両方が施されている語については四章で扱う。

「二一」名詞のアクセント

二拍第三類「月ワ」 $\langle UUD \rangle$ 月「ナミモ」 $\langle \times FU \rangle$ 波「モトノ」 $\langle DD \rangle$ 元「ヲキユク」 $\langle S \times SU \rangle$ (ヲ2点)沖。第三類は○○●○の変化を起す。「月は」は $\langle UUD \rangle$ で「月」部分は高平の胡麻章、「波」 $\langle \times F \rangle$ は「ミ」で下降する●○を反映する。「モトノ」の「庭」がどのような節なのか不明。「沖」 $\langle S \times \rangle$ は「キ」に譜がないが●○を反映する。おおむね体系変化後の高起式アクセントで節付けされている。

三拍第四類「ヒ、キモ」 $\langle UUSD \rangle$ 響「タモトカナ」 $\langle U \times UF \times \rangle$ 袂「タモトカナ」 $\langle USSD \times \rangle$ 袂。第四類は○○○●●○の変化をするが、施譜はすべて体系変化後のアクセントを反映する。「響」 $\langle UUD \rangle$ 「袂」 $\langle USD \rangle$ はまさに●●●○そのものを反映。「袂」 $\langle U \times U \rangle$ の●●●は、高起式を保ちながらも音楽的な変容がみられる。

三拍第五類「スカタワ」 $\langle UDX \times \rangle$ 姿「ナミタノ」 $\langle UFX \times \rangle$ 涙「ナミタモ」 $\langle XD \times \rangle$ 涙。第五類は○○○●●○●●○となり、この変化は第四類の○○○●●○の変化よりも遅れたといわれる。施譜をみると、「涙」の $\langle XD \times \rangle$ は●●○を、 $\langle UFX \rangle$ もFの拍内で下降するので●●○を示す。「姿」は、「ス」に合点があり、上げ胡麻が下方にずれているが $\langle UDX \rangle$ と見た。これも体系変化完了後のアクセントを反映する。

なお、三拍第六類かとされるものに「ヲキナヨト」 $\langle UDUUD \times \rangle$ 翁がある。第六類は低起式であるが、この施譜は高起式を反映する●●○の胡麻章が施されている。室町後期の観世元類謡本には「翁」は○○●を反映する施譜例がみられる。「翁」は

『観名・鎮名・神紀・巫私・丙私』に○○●●、『京和・袖高』に○○●●もある。現代京都は、低起式の○○●●・○○●●である。○○●●○○●●○○○の変化過程が現れた可能性もあるが、第四類「袂」に「U×U」がみられることから、●○○●は●○○○の音楽的な変容とみる。

三拍その他「アラタノ」(××××F)新「チイロノ」(UUSD)千尋「二ヨノ」(×F×)一夜「ユメチヲ」(UUD×)「夢路」。

「新た」は「四座」(角角徴)があり、体系変化後に高起式に変わったアクセントを反映する。二拍十一拍は「一夜」(「夢路」。

「一夜」は(×F)で●●●●を反映する。「一夜」は「巫私・袖高」△平平上V、『神紀・人紀・袖京』△平平上V、近世の「近松・大観」は「ひと」の○○●●を活かした○○○のアクセント。現代京都は●●○○○○○○V●○○のアクセント変化を経たものと、

「ひと」○○のアクセントを活かしたものがあつたと思われる。「夢路」の前部成素は第三類で体系変化前には○○○となり、これが体系変化を経て●●○となったアクセントを(UUD)は反映する。一拍十二拍の「千尋」は「平節」に○○●●の例があるが、胡麻章(UUS)は●●○○を示す。「千」は○○と推定され、

「尋」は「観名・浄拾」に△平平Vがあり、古く○○○○であったと考えられる。数の意識が強ければ、「尋」のみ体系変化をした○○○のアクセント型になるのだから、「チイロ」とハ行転呼を起しており一語としての複合意識が強く○○○○V●●○○に変化したアクセントを反映するのであろう。

四拍名詞「ナキアサキヌ」(×SUS×F×)麻衣「アサヌ

二(U××××)麻布「イトナミヲ」(××××F×)営「ウキフネ」(UUD×)浮船「ウラ風ヤ」(××DDD)浦風「シヲカマノ」(××××DF)塩竈「タカサコ」(×薙DDD)高砂「ホソヌ」(UUF×)細布「マツハラ」(UUSD)松原「山カケニ」(×F××)山影「ヤマ風」(×××D)山風「ヨミヒト」(DUD×)読入

二拍十二拍の複合語が多いので、この語構成を中心に体系変化により式の変化が起こる可能性のあるものを考察する。二拍名詞第三類十二拍名詞第一類からの複合名詞に「麻布」「浦風」「塩竈」「地名」「山風」がある。それぞれのアクセント例には「麻布」は「関名」△平平上上V・「前和」△平平上上V、「塩竈」は「顕天片古・顕大古」「袖京」△平平上上V、「山風」は「毘古」△平平上上Vで体系変化後の「大観」●●●●。「索引篇」でこの語構成の例をみると、体系変化前にアクセント例のある二七語に低起式例。多い順に○○○○○一一例・○○●●と○○○○○一一例・○○○○四例以下略。これらが体系変化して、高起式●●○○●●○○○○○○○のいずれの型にも変化した可能性があり、それぞれの譜は体系変化後のアクセントに基づくことを示す。

二拍名詞第三類十二拍名詞第四類の「麻衣」(UUS×F)は、●○○○か(S)まで高い●●●●を反映した譜と考えられる。「索引篇」には第三類十第四類で体系変化前からアクセント例が一八語にある。最多は○○○○○二三例で、この語構成のものも体系変化後には高起式になる。

二拍名詞第三類十二拍名詞第五類の「山カケニ」(×F×××)

は●○○か●●●●を反映する。「索引篇」に体系変化前はこの語構成例が少なく「足鍋・土鍋・馬蛭」の三語で○○●●が二例、○○○○・○○○○が一例ずつである（最終拍の●は●か）。体系変化により高起式になったアクセントを譜例は示している。

二拍名詞第四類十二拍名詞の「マツハラ（UUSD）松原」は●●○○。「頭拾」△平平上△、「平節」・現代京都アクセント●○○○。施譜は体系変化後のものを現す。

二拍第二類動詞連用形十二拍名詞第四類の例の「ウキフネ（UUD）」は●●●○○。「索引篇」に体系変化前のこの語構成の例は九語で○○○○が六例。下降位置が異なるものの体系変化後のアクセントを反映する。

二拍第二類動詞の連用形十二拍名詞第二類の例に「ヨミヒト（DUDX）読人」がある。「索引篇」に体系変化前のこの語構成の例は七語で○○○○が六例。これも体系変化を経て高起式アクセントになるはずである。しかし、譜例は○○○○を示す。これは、四段第二類動詞が体系変化で式が変わることなく低起式であり、動詞連用形の○○のアクセントを活かした施譜になっているのである。

第二類形容詞「細し」の語幹十二拍名詞第一類からの複合語に「ホソヌノ（UFx）細布」がある。「細し」は体系変化前から複合名詞の前部成素にたつと高起式でのみ現れる。施譜からは●○○か●●○○のアクセントを反映すると思われるが、体系変化によって高起式になった例ではない。

地名「タカサコ（X延DDD）高砂」は「平節」「玉淵」「大

観」に●○○○の例がある。「高し」は第二類形容詞で、体系変化前には前部成素の低起式を活かしたアクセント型であり、体系変化により高起式になった。施譜も●○○○を反映する。

転成生名詞である「イトナミヲ（X××F×）営」は、いわゆる第二類動詞「営む」からで体系変化前は○○○○で、変化後は「平節」●●○○の例ようになる。施譜もこれを反映している。

なお、「阿」の「アマツソラ（UDXX）天」は、四拍名詞ではないが墨胡麻であり、朱胡麻よりも世阿弥自身による施譜である可能性が高い。「天つ」は○○○○V●○○の変化を受け、施譜はこの体系変化後の●●○○を反映する。

二二三 第二類動詞のアクセント

未然形「フカル、（D?SXX）吹」「フカル、（DUD）吹」「ナガメラル（USXX）眺」「ヲカマン（DUUF?）拝」「ニゴサシ（UDX）濁」。未然形は付属語の接続により、体系変化後は未然形一般・未然形特殊①・未然形特殊②の三形に分かれる。特殊形②「る・らる」がついて体系変化を起こし、動詞アクセントは二拍●●・三拍●●、「ん・じ」は特殊形①に接続し三拍は●○○になる。二拍の「吹く」は二例とも謡い始めの部分であることにより語頭を低く示していると考えられるが、終止形が体系変化に関わらずに○●であることに影響の可能性もあるか。未然形三拍はいずれもアクセント体系変化後のアクセントで節付けられている。「眺る」は型どおりではなく一般形の○○○、「拝む」は●●○から語頭が低く後退した○○●、「濁る」は

変化どおりの●●○である。

連用形「ノコシテ〈UUDX〉残」「ラシヒラキテ〈永DUUD
X〉開」「マイリテ〈XXFD〉参」「コカレタエカネテ〈Xクル
DDDDXX〉焦」。連用形一般の例で、二拍は低起式を保つ
が、三拍は○○●○○の体系変化を受ける。●○○ばかりで
はないが高起式を反映する施譜とその変容である。

終止形・連体形「サユル〈XDU〉冴」「ヲトルヲモ〈XXUU
D〉劣」「クモル〈UDX〉曇」「シノグ〈SDXX〉（シに二胡
麻）凌」「劣る」を除き、高起式アクセントを反映する。「劣
る」のみ体系変化前のアクセント○○●のような施譜である。
「劣る」だけ体系変化が遅れる個別の要因は考えにくい。低起が
みられる他の理由には、「マサルヲモヘツラワサシヲトルヲ
モイヤシムナトノ」対表現で、第一類の「優る」高起と対比さ
せるためにアクセントと離れた低起の譜が付けられた可能性があ
る。直前の「はしる」記号も何か関係があるか。また、「冴ゆる」
の「ル」に付けられた上げ胡麻は、区切り点の直前であり、アク
セントとは無関係の句末のイントネーションを現すのであろう。
已然形・命令形「ヲモエトモ〈UFXX〉思」。○○●○○
○と変化したアクセントを反映する。

三 生駒宝山寺所蔵本の胡麻章

宝山寺蔵本は胡麻章の施譜例は少ないものの、本文と同時に
胡麻施譜が行われた可能性は高い。ただし、墨色の異なる部分も
みられ、例えば「雲」の六七行から七一行のあたりは章がやや濃

く他と異質で、書き入れをした可能性がうかがえる。

「三一」名詞のアクセント

二拍第三類「月モ〈DD入〉月」「ソノトキ〈DXDX〉その時」
「ナミニ〈SSF〉波」「ハナヲ〈D下D〉花」「ハナニ〈DU
X〉花」「ハナヲ〈UDクル〉花」「クモノ〈USS〉雲」。第三
類は体系変化で○○●○となるのだが、この施譜の中では体系
変化後のアクセントを確実に反映しているのは最後の二例だけだ
がある。「波」も型どおりではないが、高起式を反映する。他は、
いずれも第一拍に下げ胡麻がある。しかし、「ハナニ〈DUX〉
花」は○○を示しているわけではなく、○○●○となったのち
語頭を低く始める○○●の謡いかたを指示したと考えた方がよい。
その他の施譜環境をみると、「月モ〈DD入〉月」はこの直前に
字間があり、このすぐ後の第五類「影」が「カケサス〈UDX
X〉影差」のように高起になっており、単語アクセントのとおりに
謡わない作曲が考えられる。また、「ソノトキ〈DXDX〉
時」は平安来●●の「その」の語頭にも下げ胡麻があり、アクセ
ントに外れるのは作曲上の要請による可能性が高い。よって、語
頭の下げ胡麻は体系変化を經ていないアクセントを反映するもの
としては扱うことができない。

なお、体系変化後の資料には、二拍名詞第三類+「の」が●●
○で現れるが、体系変化に関わらず●○である第二類も助詞
「の」が下接の場合に●●になる例や、単独でも●●で現れるこ
とがある。世阿弥自筆本にも、「ヲトニ〈UUX〉音」「ヒトノ

「UU×」人」にこの傾向の現れた例がみられる。

その他「サカノテンワウノ」UUU「嵯峨」は「袖京」に△平
平V、「平節」●○で第三類と同じアクセント型を持つと考えら
れる。助詞「の」がついて、○○○V●●○となるところだが、
「嵯峨天皇」の結びつきが強く、●●●であったか。

三拍第四類「ハヤシ」S××「林」ヒカリヲ×UUU「光」
「ホトケノ」UUUシラル「仏」4△「タモトカナ」DS××
×「袂」。「林」は高起式を反映し、体系変化後のアクセントで作
曲されたものと考えられる。「仏」は助詞「の」の下接のため高
拍が続いたと考えられる。「光」は低起式のアクセントを反映す
るような譜ではあるが、語頭に「ニノク」という書き込みをした
ために胡麻章をずらして付したと考えられる。「袂」は観世文庫
蔵本に●●○とその音楽的変容と見られる●○○のアクセントを
反映する譜が見られた。DS×も体系変化した●●○からの
変容で●●○が現れているのであろう。

三拍第五類「イノチヲ」S×××「命」スカタモ×UU×
「姿」。「命」は○○●V●○○の変化後のアクセントを反映する。
「姿」は高拍がずれたものであろう。

四拍名詞「ワカアリサマヲ」D×DDD×D「有様」「イリウミ
（クル×F×U）入海」「セキモリモ（UU×××）関守」「ソラコ
トヤ（×××D下）虚言」「ナカハシ（××FS）長橋」「サヨノ
ナカ山ワ（××UUU×F）中山」「ヤツハシヤ（UUUD×
八橋」

二拍十二拍の語構成を中心にみる。「有様」は（DDDXD）

としたが、「ワガ」と連綿で書かれたところに下げ胡麻、「サマ」
の「サ」の下方に下げ胡麻で、「ワガアリサマ」全体を低く謡う
節付けと思われる。「雲」のこの部分は章などが濃く後書きの可
能性もあり、他もあまりアクセントを反映しない。「関守」は「袖
高・袖京」△平平平上Vがあり、体系変化を経た●●○○を反映。
「虚言」は体系変化後の高起式のアクセント例しかないので、
【索引篇】で体系変化前の二拍名詞第四類十二拍名詞第三類の複
合語のアクセントをみる。二四語あるうち、多い順に○○○○一
一例・○○○○六例である。○○○○V●●○○の変化後のアク
セントが譜例に合う。「長橋」は形容詞第二類十二拍名詞第二類
で○○○○か○○○○あたりからの体系変化後の高起式アクセ
ントを反映。「中山」も「訓古」「顕古」などに△平平平上Vがあり、
体系変化後の高起式アクセントを反映。「入海」は「クル」が高
く始まるので、「入り」第一類高起式を活かした施譜。「八橋」は
「袖」諸本に△上上上平Vがあり、施譜も●●○○を反映する。
その他は略す。

【三一二】第二類動詞のアクセント

未然形「ミエン（UD）見」「ヒラカント（××DUD）開」。
助動詞「ン」は特殊形①に接続する。二拍は○○●V○○○、三
拍は○○○○V●●○○と体系変化する。「ミエン」は特殊形②
のような譜ではあるが、両例とも体系変化後のアクセントを反映。
連用形3↓2か「カクレカネタル（USD××××）隠」。「カク
レ」の「ク」のSはDに変更したのかもしれない。古く第三類○

●○だが、第二類の○○●から変化した●○○を反映。

終止形・連体形「イツル」(D×下)出「イワウ」(US×)祝

2#「カック」(U××)被「3」2「クルウラン」(UUU××)

狂。「イヅル」は、「でる」との関係などあるのか「近松」にも

第三類同様のアクセントが見られる。「祝う・被く」は○○●V

○○○の変化後のアクセントを反映。「狂うらん」は「らん」○

●一般形につく助動詞で体系変化を起しても●○○となりそうだが、特殊形接続からの体系変化のような施語である。

已然形「コモレリ」(U×××)「筆」体系変化後のアクセント●○

○を反映する。

○を反映する。

四 能本からみた体系変化の時期について

アクセント体系変化完了の時期については坂本(一九九七)で

諸説について挙げ、世阿弥自筆能本の声点から考察を加えた。世

阿弥時代のアクセントについては、桜井茂治氏が真言宗所伝の

「論議書」に反映したアクセント体系を踏まえたうえで、「世阿

弥の生涯は、ちょうど、この体系変化の過渡期にあたり、彼の一

生の前半は「古代アクセント」、後半すなわち能楽書を著した頃

は、「近代アクセント」の中に身を置いて生活していたといふこ

とになる」とする。そこで、胡麻章と声点の関係を明らかにした

上で、世阿弥自筆能本全体からアクセント体系の完了の時期を再

考することにする。

〔四一〕声点と胡麻章

世阿弥はその能楽書で節付けとアクセントに関してたびたび記述しており、「節訛りは苦しからず。文字訛りは悪かるべし。」は

自立語についてはアクセントに忠実に、辞は節の音曲性を保つた

めに気にしなくてもいいと解釈される。能本に声点と胡麻章とが

施されている語例について、自立語の例は声点と胡麻章とで同じ

高低を示しているかどうか、節付けとアクセントの関係は理論ど

おりに行われているのかについて明らかにする。声点の反映する

アクセントと抽出箇所については坂本(一九九七)で示したので

省略する。

まず、声点と胡麻章とではほぼ同じ高低であるのは、「カエル

ハ上上○V(UFS)帰「トカエリハ上上○○○V(XFX×)

十返「トヨフトハ上○○○V(XFX×)豊太「フルキハ上○

○V(U'FX)古「シヲタレハ上○○○V(XDX×)潮垂

「ヲサマリハ上○○○V(UFX×)納「アコヤノハ上上上

上V(D×××)阿古屋「山ノウエノハ上平?○○○V(U

UF)山上「マツラヒメトハ○○○上○○○V(××UF

D)松浦姫「サヨヒメカハ○○上○○○V(××UFN)小夜姫。

以上は、廻し(F)が下降の謡い方を表わすので、語頭以外であ

ればアクセントが高の拍にも低い拍にも付けられ、声点と胡麻章

の示す高低は同じといえる。このうち、第二類動詞の「帰る」

「納まり」、第二類形容詞の「古き」、第三類二拍名詞が前部成素

である「潮垂」が高起式であることから、声点も胡麻章もそれぞ

れについて考察したとおり、体系変化後の同じアクセントによっ

助詞「や」は『毘古』に「うけなれやハ上上平上V」の例があり、詠嘆・問いかけ特有の卓立したアクセントである。自筆能本の「ヤ」の声点は卓立性をたもち、胡麻章はそれに反している。『音曲口伝』にある「真名の文字の内を拾いて、詰め開きをてに」はの字にて色どるべし。』は節のかかりをよくするために、助詞アクセントを詠ることを示す。助詞のみへの胡麻施譜例は非常に多いのは、助詞部分で節を育てるためといえる。

〔四―二〕アクセント体系変化下限

世阿弥自身のアクセントが体系変化後のものであることを能本以外から裏付けられるような語例や記述を世阿弥能楽書に求めても今のところ確証をえるには至らない。『花鏡』で「訛り」と四声について述べたあと、「律ハ上ヨリ下ル声、入息。呂ハ下ヨリ上ル声、出息。律は機ヨリ出声。律ハ無、呂ハ有。然者、律ハ主呂ハ横ナルベキ歟。」とある。『風曲集』に音曲習道論を展開しており、声の横主（横堅）について「音声に、横・主の二つあり。呂律に取らば、横は呂、主は律なるべきならん」とある。『風曲集』の声の横主（横堅）や『花鏡』の律呂から考えると「主」は下降調を示す。『五音』にこの「主」の節付けが二三例あり、「のどけき」「ゆへに」についた例など●○：のアクセントを反映し、体系変化後の例となりそうである。しかし、節付け自体が後書きの可能性があり確証とはならない。

坂本（一九九七）では、世阿弥能本の声点とアクセント体系変化下限の完了について、「世阿弥自身の差声」「後世の書き入れ」

の二つの可能性について述べた。二、三、四―一で検討したとおり、観世文庫蔵・宝山寺蔵の世阿弥自筆本の胡麻章は、胡麻章の量や形など異なるものもあり、アクセントと譜との関係にも多少の違いはあるが、ともにアクセント体系変化完了後のアクセントを反映している。特に、古い奥書を持ち、他の能本に比べて後の手による加筆の可能性の少ない「難」にアクセント変化後のアクセントによる節付けがなされている点や、『阿』の墨胡麻が変化後のアクセントを反映することなど、世阿弥の生育期にすでにアクセント体系変化が完了しているとみる。声点の反映するアクセントと胡麻章の反映するアクセントに年代的な隔たりがないことから、声点と胡麻章がともに世阿弥自身の手により施された可能性もかなり高いものといえる。世阿弥能本からは、世阿弥生年を一三六三年として、このころから十数年の間がアクセント体系変化の下限の完了期といえそうである。

五 おわりに

世阿弥自筆能本の胡麻章と声点の反映するアクセントから、アクセント体系変化下限の完了時期の推定を行なったが、演者のための能本に施された胡麻章がどのような意味を持つのかという点が明らかにできてはいない。今後は、室町期の古い謡本の分析を行ない体系変化完了直後のアクセントの実態について考察を続けるつもりである。

- 注1) 坂本清恵「アクセント資料としての世阿弥自筆能本——声点を中心に」『国語研究』六〇(一九九七)
- (2) 三宅晶子「世阿弥時代の能本」『世阿弥自筆能本集 校訂篇』岩波書店(一九九七)
- (3) 坂本清恵「初期義太夫節の節付け——アクセント史からの考察——」『芸能史研究』八八(一九八五)
- (4) 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版(一九九七)
- (5) 秋永一枝「古今和歌集声点本の研究 研究篇上」校倉書房(一九八〇) 四六四頁。
- (6) 秋永(一九八八) 一三八頁。
- (7) 秋永一枝「古今和歌集声点本の研究 研究篇下」校倉書房(一九九一) 一五三頁。
- (8) 坂本清恵「動詞未然形のアクセントと付属語の接続について——近松世話物浄瑠璃本を資料にして——」『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院(一九九二) の分類による。
- (9) 坂本清恵「中院通茂の声点注記について——京都大学附属図書館蔵『古今和歌集聞書』を中心に——」『国語国文』七二六(一九九五)
- (10) 桜井茂治「世阿弥の能楽書とアクセント——室町時代のアクセント資料として——」『国学院雑誌』六六二・三(一九六五)
- (11) 前田富祺「能楽論におけるアクセント観」『国語学研究』五(一九六五) および、桜井(一九六五)
- (12) 表章・加藤周一校注『世阿弥 禅竹』岩波書店(一九七四) の「音曲口伝」の注による。
- (13) 坂本清恵「義太夫節の詠り——「鬚詠り」を中心に——」『演劇研究』一一(一九八六) に指摘。
- (14) 能楽論についての引用は注12により、表章・竹本幹夫『岩波講座 能・狂言II 能楽の伝書と芸論』(一九八八) を参照した。なお、『世阿弥 禅竹』の補注四四四頁に「主」は声帯を締めて謡う声とある。

『観世文庫所蔵本』「難波梅」「ニライモ(U×××) 匂・クセ(難75)「アリカタヤ(U D×××××) 有難・ノリ地(難100)「ツクハ山ノ(U U×××) 筑波山・クセ(難73)「二拍第一類「ソテニ(S*S) 袖・サシ事(松78)「ソテヲ(U U) 袖・上ゲ歌(布16)「友ナラン(S D D××) 友・上ゲ歌(阿9)「第二類「フユノ(D×××) 冬・上ゲ歌(布34)「第三類「月ワ(U U) 月・上ゲ歌(阿76)「ナミモ(×F U) 波・クセ(布58)「モトノ(庭D) 元・上ゲ歌(阿53)「ヲキユク(S×S U)「ヲ2点 沖・下ノ詠(松37)「第四類「イマモ(U U) 今・問答(松28)「カミニコソ(D S××D) 上・下ゲ歌(阿46)「フネ(D×) 舟・下ノ詠(松37)「ユクフネノ(××D D××) 舟・上ゲ歌(松41)「ヤドモ(S U F) 宿・サシ(松50)「第五類「カケヲ(D F D) 影・ワカ(阿88)「三拍第一類「ソノシルシ(××U S D)・上ゲ歌(布33)「ヤナギヲ(U S×××) 柳・上ゲ歌(布16)「#「ミカケナルランヤ(××D U××F)・上ゲ歌(布80)「第二類「ユウヘカナ(U U D××) タ・上ゲ歌(松22)「ミトリモ(××D D) 緑・サシ(阿77)「第四類「ヒ・キモ(U U S D) 響・サシ(布13)「タモトカナ(U×U F××)・上ゲ歌(阿19)「タモトカナ(U S D×××)・一セイ(松16)「第五類「スカタワ(U D×××) 姿・ノリ地(阿90)「ナミタノ(U F×××) 涙・サシ事(松78)「ナミタモ(×D×××) 涙・上ゲ歌(布16)「第六類6か「ヲキナヨト(U D U D××) 翁・ロンギ(阿59)「その他「アサカノヌモノ(D D×××D) 安積・上ゲ歌(阿8)「アラヲ(××S F××) 新た・ノリ地(布85)「タヒネカナ(××F×××) 旅寝・上ゲ歌(松75)「チイロノ(U U S D) 千尋・中ノリ地(松10)「ヒカケツ(S×D S) 日影・一セイ(阿13)「「ヨノ(×F××) 一夜・サシ(松50)「エメチヲ(U U D××) 夢路・中ノリ地(松10)「四拍名詞「ナキアサキヌノ(×S U S×F××) 麻衣・上ゲ歌(布35)「アサヌノニ(U×××××) 麻布・クセ(布55)「イトナミヲ(×××F××) 営み・上ゲ歌(布35)「ウキフネ(×U U D××) 浮船・サシ事(松18)「ウラ風ヤ(××D D) 浦風・下(松102)「カワミツニテ(××F×××) 河水・問答(布22)「イクハルノ(×××U D) 幾春・クセ(阿80)「コノカミ(×××D) 兄・タリ(布43)「シヲカマノ(×××D F) 塩竈・(ワカ) [阿87]「タカサコ(××庭D D) 高

砂・クセ〔阿83〕「タキツセ〔U×D〕」瀧瀬・クセ〔布56〕「ホソノ
 「UUF×」細布・上ゲ歌〔布34〕「マツハラ〔UUSD〕」松原・クセ
 「阿84」ミチノクノ〔DDSKLD×〕陸奥・上ゲ歌〔阿75〕「山カケ
 ニ×F××」山影・サシ〔布13〕「ヤマ風××D〕山風・クセ〔松
 52〕「ヨミヒト〔DUD×〕」読人・上ゲ歌〔松40〕第二類動詞未然形「フ
 カル・(D?S××)吹・上ゲ歌〔阿54〕「フカル・(DUD×)吹・歌
 「阿92」「ナガメラル〔US×××〕眺・上ゲ歌〔松21〕「ヲカマン〔D
 UUF?〕」拜・歌〔布69〕「ニゴサシ〔UDU×〕」濁・クセ〔布58〕「連
 用形「コギユクフネノ〔SSU××××〕漕・上ノ詠〔松96〕」サエコヲ
 リテ〔DUUUF×〕訝・上ゲ歌〔布92〕「エタ・レテ×××DU
 垂・ノリ地〔阿90〕「コカレタエカネテ××クルDDDD×××」耐・ノ
 リ地〔松94〕「ミエテ〔D××〕見・上ゲ歌〔布33〕「ツキニケリ××U
 UDX×〕着・上ゲ歌〔松9〕「ノコシテ〔UUD×〕」残・掛け合〔松85〕
 「ラシヒラキテ〔永DUUD×〕」開・中ノリ地〔布100〕「マイリテ××
 FD×〕参・問答〔松29〕「コカレタエカネテ××クルDDDD×××
 焦・ノリ地〔松94〕」終止形・連体形「サエル××DU×〕訝・一セイ〔松
 16〕「ヲトルヲモ××UUUD×〕劣・下ゲ歌〔阿45〕「カエル〔UUS
 帰・ロンギ〔阿60〕「クモル〔UD×〕」曇・一セイ〔阿67〕「シノグ〔S
 DX×〕(シに)胡麻・凌・一セイ〔阿13〕」已然形「ハラタテル×××
 SD×〕立・上ゲ歌〔阿35〕「ヲモエトモ〔UF××××〕」思・サシ〔松
 50〕

〔生駒宝山寺所蔵本〕一 拍第一類「ミナレトモ〔F下×××〕身・上ゲ歌
 「盛19」第三類「ヒラ〔DU〕」火・歌〔雲106〕二 拍第一類「ニシノ〔ハ
 リSS〕」西・歌〔江117〕「ミチヲハ〔US×××〕道・下ゲ歌〔盛20〕」ヲ
 イソノモリヲ×××FUU×〕森・上ゲ歌〔盛19〕第二類「ウタ××
 F×〕歌・上ノ詠〔江84〕「ヲトニ〔UU×〕音・上ゲ歌〔多46〕×「ツ
 マモ(×DU×)妻・下ゲ歌〔雲88〕×「ヒトノ〔UU×〕人・盛120〕」
 第三類「月モ〔DD×〕月・上ノ詠〔江83〕」ソノトキ〔DX×〕時・
 上ゲ歌〔雲69〕「ナミニ〔SSF×〕波・下ゲ歌〔盛20〕」ハナヲ〔D下
 D〕花・問答〔雲28〕「ハナニ〔DU×〕花・上ゲ歌〔雲67〕」ハナヲ
 「UDクル〕花・一セイ〔盛10〕」3×「クモノ〔USS〕」雲・上ゲ歌

〔雲18〕第四類「イマモテ〔DUD〕」今・クリ〔盛89〕「ソラ〔S
 ×〕空・サシ〔盛11〕」第五類「ハルソト〔SSF下〕」春・ロンギ〔盛
 109〕5△「ノベニ〔FユルS〕」野辺・下ゲ歌〔盛21〕「カケサス〔UD
 ××〕影差・上ノ詠〔江83〕」その他「サカノ〔UUU〕」嵯峨・クセ〔多
 85〕「ヤツノ×DU×〕ハ・クセ〔多89〕」三拍第四類「ハヤシ〔S*
 ×〕林・上ゲ歌〔雲18〕」ヒカリヲ〔UUU×〕光・一セイ〔多37〕「ホ
 トケノ〔UUUシヤル〕」仏・上ゲ歌〔多47〕4△「タモトカナ〔DS×
 ××〕袂・一セイ〔盛10〕」第五類「イノチワ〔S××××〕」命・掛け合
 「盛67〕「スカタモ××UU××〕姿・クセ〔多90〕」第六類「マコトニ
 「UD××〕誠・上ゲ歌〔雲68〕」その他「イモセノ〔D××〕」妹背・上
 ゲ歌〔多47〕「エクチノ〔UD××〕」江口・ロンギ〔江54〕「ビウカノ
 「SD××〕日向・サシ〔雲85〕」四拍名詞「ワカアリサマヲ〔D×DD
 D×D〕有様・上ゲ歌〔雲69〕」イニシエワ××UUU×〕古・上ゲ歌
 「江46〕「イリウミ〔クル×FU〕」入海・ロンギ〔盛25〕「コノハナ〔S
 ×S*〕」木花・上ゲ歌〔雲16〕「セキモリモ〔UU××××〕」関守・上ゲ歌
 「盛17〕「ソラコトヤ×××D下〕虚言・サシ〔多40〕」ナカハシ×
 ×FS〕長橋・上ゲ歌〔盛18〕「サヨノナカ山ワ××UUUF×〕中
 山・ロンギ〔盛23〕「日ノモトニ〔U×D下×〕」日本・盛120〕「マツサカ
 ヤ〔UUDDF×〕」松坂・下ゲ歌〔盛16〕「ヤキカリン〔DD×××〕」焼
 狩・歌〔雲106〕「ヤツハシヤ〔UUUD×〕」八橋・下ゲ歌〔盛21〕第二
 類動詞未然形「ミエン〔UUU〕」見・ロンギ〔江50〕「ヒラカント××
 DUUD×〕開・上ゲ歌〔雲70〕」連用形「ウチイデ、(クルUS×××〕打
 出・ロンギ〔盛25〕「ナリニケレ〔UU××××〕」成・上ゲ歌〔雲71〕「タ
 チヤノホラン××U入U×××〕立・一セイ〔多70〕「ツキニケリ〔S*
 ×××〕着・上ゲ歌〔雲18〕」3↓2か「カクレカネタル〔USD××××
 ××〕隠・下ゲ歌〔雲87〕」終止形・連体形「アリトワ〔UU×××〕有・ロ
 シンギ〔柏139〕「イツル〔D×D下〕」出・次第〔盛71〕「イワウ〔US×
 祝・歌〔盛12〕」2#「カツク〔U××〕」被・上ゲ歌〔雲15〕」3↓2「ク
 ルウラン〔UUU××〕」狂・一セイ〔柏58〕」已然形「コモレリ〔U××
 ×〕」竜・上ノ詠〔雲88〕